

裏見の瀧 不動立

日光山よりひつじ申に當れり、日光より一里半程アリ、瀧の所へは山を越テ又下る也、瀧の少前に岩のほらあなあり、二間に三間ほどあり、其内に玄やうす河原のうば石にて作る、其外石塔三ツ四つあり、新湯殿といふて、山伏參詣してぼんでんを納る也、それより瀧へ下り、瀧のうらより見る也、たき高サ二丈ほどあり、瀧の廣さ三間ほどあり、瀧のうらに石にて不動作り、瀧の下に立る、中々凡人一人晝も行がたし、所の者にたづぬれば、天狗の住家と云、おしこといふ者は、此瀧のちかく成木の枝にかけると云々、

霧降の瀧 日光山より丑寅

道法三里ほどあり、瀧の下やげんのごとく谷也、瀧三段に落る、上の瀧には松紅葉其外色々の木共よき景にはへたり、たき三段におつるせいにて、きりのごとく水ちる也、日光開山の景也、狩野の探幽繪にかきしと也、其ほど近くみれば、布引の川とて見ゆる、其川にてむかし天女布さらせしといひつたふる也、

戰場が原 むかし神いくさの場也といひ侍る、さも有つべし、

守子石 中善寺ふどう坂 日光山のもり、中せんじに參らんと願ひて、ふどう坂までのぼりしが、一夜の内石になりたるも、道づれかたりしと云々、中善寺は女人けつかいの山也、

伊吹山 近江國同名有 後拾遺戀のうたに、藤原實方

かくとだにえやは伊吹のさしもぐささしもゑらじなもゆるおもひを

室八島 新後撰夏の部に家隆のうた

立のぼる煙も空に成にけり室の八島の五月雨のころ

那須野 此野に殺生石あり、そのむかし近衛院の宮女、玉藻の前化して此石となれり、玉ものま